

# 猫 蓑 通 信

第 124号

令和六年  
(2024年)  
6月15日発行  
(年3回発行)

## 東明雅先生のこと——五十嵐讓介

この度、平林香織さんから東先生のことを書いて欲しいと頼まれました。東先生のことはいままでいろんな方が素晴らしい文章を発表されているので、私のような者がいまさら付け加えるものはないのではと思ったのですが、私の本棚の片隅に「明雅翁俳諧聞書」と題したノートが眠っているのを思い出し、これを基に、会員の皆様に伝えられることがあるかもしれないと思いなおし、つたない筆を執ることにいたしました。

私の連句修業の最初は、昭和四十六年に信州大学に入学し、二年生の時に東先生の「蕪村の連句」の国文学特論を受講した時です。授業では、連句実作を経験。我々学生たちは、東先生から「さあさあ何でもいいから句を出して」と催促されてもなかなか言葉が出てこなくて戸惑ったものでした。でも面白かった。そして、九月だったか授業終了後、先生は我々学生に、あの名著、『夏の日』（四十七年九月十日発行です）ので出来立てほやほや）を一人一人手渡しでプレゼントしてくれたのでした。読んで付

味や流れなどはよくわかりませんでした、一句一句、特に短句が皆輝いていて引き込まれました。

三年生になり、卒論のテーマを決めるにあたり、あれこれ迷ったが芭蕉をやってみたいと思いい、先生のお宅に指導教官のお願いに伺ったところ、先生はしばらく沈黙の後、「んー。芭蕉をやるのなら浅間温泉で月一回、信大連句会をやっているから来てみなさい」とおっしゃってくださいました。

さて初めての信大連句会。昭和四十八年六月十日。この時は高橋玄一郎氏が捌でした。ベテランの方たちの付けの短冊が次々と出される中、その速さに圧倒されました。ただ参加した証としてでしょうか、一句だけ採用していただきました。この記念の一卷は、『高橋玄一郎文学全集第一巻』に「ダム若葉の巻」として収録されています。翌月の七月七日、今日こそはと勇んで出席し、また一句だけ採られました。今、昔の古ぼけた連句ノートを引っ張り出して見ているのですが、当時のことがかすかに浮かんできます。また昔の資料をいろいろ探し出し読んでいたら面白い事に気づきました。昭和四十八年七月七日は、東京義仲寺連句会を指導されていた野村牛耳先生が連衆の方々を率いて信大連

### ●目次●

▽東明雅先生のこと

五十嵐讓介

1

◎令和六年猫蓑会初懐紙作品 六巻

4

◎第十八回猫蓑会リモート作品・二十韻二巻

7

半歌仙・短歌行 各一卷

8

▽連句の先達・誌上インタビュー Q&A

その⑤ 本屋良子さん

8

▽第28回えひめ俳句連句大会受賞速報

10

◎愛媛県知事賞「花に逝く」の巻

10

▽えひめ俳句と松山

鈴木千恵子

11

●事務局だより

12

句会に参加された日だったのです。この翌年、牛耳先生はお亡くなりになりました。このことは、『野村牛耳連句集 摩天楼』を読んで初めて知りました。この『摩天楼』にこの日の連句「湖上いま」（石川宏作捌）が収録されています。採られた句を記します。

ゲイバーのドア『マドンナ』の紋を押し 南方子

プリンプリンと桃割れの尻 讓介

磯の歌 浮雲の歌 青嵐 きよみ

私の軽佻な句をきよみさんが見事に転じて下さ

いました。

三年生の六月から四年生の十一月までに九回参加、結構頑張ったがまた楽しく参加させていたかったです。そして昭和五十年になんとか卒業。卒業式の日、国文科卒業生の女子が中心となり東先生の還暦を祝う会を開きました。そこに出席して驚いたのは、先生に着てもらった赤

いちゃんちゃんこが用意されていたことです。写真を見て下さい。なかなか珍しいでしょう。思い出深い写真です。ちなみにこの写真には若き日の二村文人君が写っていますが、どの人か分かりませんか。

さて、本題の「明雅翁俳諧聞書」ノートに移ります。これは平成十二年

八月二十五日と二十六日の二日に渡って、先生の軽井沢の別荘で、先生の研究の歩みや俳諧との出会いなどいろいろお聞きした時のメモノートです。この取材旅行は、前年に出版した『連句―理解・鑑賞・実作』の執筆者（五十嵐譲介・大野鶴士・大畑健治・二村文人・三浦隆）で企画したものです。ただ我々は、先生がこれまでの歩みを纏めた「来し方の記」という文章を、『信濃毎日新聞』に昭和五十九年三月五日から十七日まで十回に分けて発表していることを迂闊にも知りませんでした。我々が聞くとした事のほとんどはこの「来し方の記」に記されています。実に名文で、東先生のことを知る一番の文献です。この文章は、信州大学同窓生による『東明雅先生追悼集 鶴一羽』（平成十六年八月）に再録されています。ただこの冊子を手に入れるのは難しいので、是非猫通に再録してもらいたいものです。



昭和50年3月明雅先生信州大学定年退官・還暦祝

では、ノートの中から「来し方の記」に出ていないことを紹介します。一つ目は、旧制五高時代の事をお聞きした時、「昔小説を書いたことがあるんだよ。『龍南』という校友会雑誌でね」とふと漏らされました。ずっと気になっていて五年ほど前にネットで調べたら「甘酒」という歴史小説だとまではわかったのですが、本文を読むことはできませんでした。このことを香織さんに話したら、さすが香織さん、すぐにメールで、今はデジタル化されネットで読むことができますとの連絡を頂きました。早速コピーしてこの原稿を書き上げたら読むつもりです。旧制五高校友会誌『龍南』二百二十六号に「甘酒」、二百三十一号に「初夏」の二編です。



『連句』シリーズ出版の基盤となった「連の会」前列左から鈴木千恵子・東聖子・大野鶴士 後列左から三浦隆・大畑健治・筆者・二村文人

二つ目はちよつとしたエピソード。先生は、昭和五十五年信州大学を定年後、南柏に移られ、俳諧普及活動に邁進されたのですが、この時、肩書を「俳諧師」とした名刺を作られました。この時の気持ちをも、「定年はうれしかった。パンザイと言いたかった。俳諧師として全国を旅しようと思った。俳諧師には近世末になると卑しさが付きまತ್ತたが、俳諧師と名乗り昔の高貴あるものに戻そうと思った」とおっしゃっていました。それに続けて、昭和五十六年に俳人協会で講演（二月七日の俳句文学館での講演か。この講演は『連句集 猫蓑』に収録されています）をした折、山口誓子氏に俳諧師の名刺

を渡したら、「顔を見ればまともに見えるがなあ」と言われたと苦笑しておりました。当時、俳諧に対する偏見がまだまだ強かったと言いたかったのかと受け止めました。

三つ目、これが一番皆様に知ってほしい事です。先生の師芦丈宗匠の俳諧の伝統を守り伝えねばとのすさまじい情熱。その師の思いを受け継ぎ、「もし誰かが、この伝統をうけつがないで、このままこの方（芦丈）がなくなられたら、我々の祖先が創り出したすばらしい文学は、そのまま絶えてしまうだろう。そうしないために我々は何とかこの伝統を守らねばならない。そんな一種の使命感」（『鶴一羽』）を持って、俳諧（連句）復興に邁進された東先生。この師弟間の激しく厳しい魂の感応については周知のことと思います。ここで紹介したいのは、芦丈宗匠の型破りな弟子の鍛え方です。昭和三十七年に大磯嶋立庵の十九世を襲名し立机披露した山路閑古氏に、芦丈宗匠は「今日どのような秀才が庵主になられたのかは知らぬが、宗匠ともなれば並々ならぬ重任である。お望みならば、一度稽古をつけて進ぜよう。近々上京するから、その折宿所へ出頭しなざるがよい」との手紙を送りつけてきたそうです（『根津芦丈三回忌追善集 芋日記』所収「芦丈先生の思い出」山路閑古 以下はこの文からの孫引きです）。この時閑古氏六十二才。東京高等商船学校教授で、戦前伊藤松宇翁の俳筵に列し「古人を空しうす」とまで激賞された人物。藪から棒の高飛車な申し入れに戸惑ったが、先様は九十才、ここは一

番我慢をして、努めて下手に出て、先方の出様によつては、教えを乞うもよかろうと思ひ、諾の返事をしたところ、「もつか上京して、清水瓢左方に在宿している。何月何日の朝愚老が顔を洗つている頃に尋ねて来て下さい。これは無理をいうているのではない。それならば時間がたつぷりあつて、十分に教えられると思うからである」との返事が来た。これに閑古氏は、「万事が意表に出て腹が立つよりもむしろ滑稽であつた。但し唯朝が早いには閉口で、夜のしらしら明けに家を出ないと、先生の洗顔の時刻に間に合わない。殊に老人は目覚めが早いのである。そんなにしてまでも教を受けることもあるまいとも思ったが、一方には、日本一ともある師匠であれば、何処か人と変わつているところがある。どんな無理も辛抱しなければ、良い師匠にはめぐり会えないとも思われた」とのことと、朝早く家を出て、柴又の瓢左邸に着いた。先生は丁度顔をあらつておられ、遅くも早くもない時刻で、先生は何もいわれなかつたが、教えるに足る奴であるという、喜びの色が眉宇にあらわれていたとのこと。それから朝飯が始まり、「先生は飯碗を片手に、早速指導を開始された。時刻は午前八時と思われたが、その日の課業が終わつたのが、午後八時であつたから、丸十二時間というもの、殆ど休憩する間もなく、稽古をつけられた」のださうです。

この時の芦丈宗匠の思ひは、死の床に就かれてからの瓢左氏への書簡の中で、「明雅子、閑古子、この兩人を本物にする事が、小老の一生の願ひであります。……対吟でなくては、充分に指導は出来ぬから、閑古子が退職して、休暇を得ては小庵に来ることを願つて居ります。心から服しているんでなければ、教えても駄目である」と述べられています。すごいですね。根津芦丈、山路閑古このお二人にお会いしたこともない私にも、この師弟の十二時間に及ぶ俳諧伝授の情景が目に浮かんでくるようです。本当は『芋日記』を読んでもらえば済むことなのですが、今この本はなかなか手に入らないのでここに抄出した次第です。

最後に皆様へのお知らせです。今、「東明雅文庫」の建築を始めています。自分としても、まさかの展開なのですが、このまさかの展開を少し説明します。昨年六月に雅子さんから東先生のご自宅を処分することになつたので、特に本の整理を手伝つてもらえないかと相談されました。私は定年後、木更津の里山に少しばかりの土地を借りて、木工の工房（兼図書室）を作り、大工仕事や木挽きなどもやっていました。材木運搬の必要から軽トラックも持つています。それで、これまで先生の御恩に何も報いることができなかつた自分ですので、喜んでお手伝いさせていただいています。この作業はまだ進行形です。私は、連句は自信がありませんが、荷物の移動の仕事は経験もあり自信もあります。雅子さんとしては先生の膨大な書物をどうするかが一番の悩みでした。古書店に売つてしまふのは一番簡単な方法ですが、雅子さんとしては恐い難いわけです。結局、明治・大正・昭

和の連句史に関係する本と先生の西鶴研究の語彙カード、先生の研究草稿類、その他文献複写類などは私のほうでお預かりし、後は古書店に引き取つてもらふしかないとの結論で作業を進めました。

七月末頃に一応目処がついて、夏は暑かつたので涼しくなつたらまた再開しましょうとなりました。ここからまさかの展開です。実は昨年十月三日、里山の私の工房兼図書室と隣に立つていた地主さんの広い木工作业場が火事で全焼しました。原因は木工作业場の漏電です。私の被害は本棚六個分の本と今までこつこつ集めてきた大工道具の焼失です。木挽きもやっていたので、大きな大鋸数丁がぐにやぐにやに焼け曲がつて焼け跡から突き出ていました。焼けてしまったことはどうしようもない。道具がなくても体得した技術は残つている。再建しようと頭を切り替えて、新しい工房兼図書室の図面を考えている時、ふと新しい図書室には、自分の本は焼けてなくなつたのだから東先生の蔵書が入るのではないかと、と閃きました。そこで早速、この案を雅子さんにお願ひしてみたら、そうしていただけるなら有難いとの言葉を頂きました。そして、「東明雅文庫」の建築となつた訳です。ただしこの文庫は先生の俳諧関係の本だけです。私一人だけの建築ですので、すぐにはできません。これから機会があつたら作業進捗状況を報告していきたいと思つておられます。



木挽きをする筆者

第百六十六回猫蓑会例会  
初懐紙 歌仙六巻 152  
令和六年一月二十八日 首尾  
アルカディアア市ヶ谷

青龍の座

歌仙「神の垂れ目」

鵜飼桜千子 捌

冬雲に神の垂れ目のふたつ三つ 桜千子

仄かに点るかまぐらの子等 孝子

ジョーカーのカードに秘策めぐらせて 葵

イヤホンいつもポケットに入れ 雅子

月今宵自転車漕いで川沿ひを 端七

あちらこちらに鴉の早贄 雅

ウ 二科展の上下分からぬ抽象画 葵

髭も小粋に誘ふセニョール 孝

ワインより赤き血潮は沸点へ 葵

液体窒素嘘を固めむ 七

独裁のおどしに使ふ核と兵 孝

月下の墓所に桜散り敷く 葵

理髪屋の噂話もうららかに 孝

インターナショナル唄ふメーデー 七

開発にもぐら一家はお引越し 雅

横断歩道杖を曳く人 孝

大花火響ける腹に沁みる酒 全

部屋の片隅寝蓑丸める 葵

ナオ ヒュッテにはインバウンドの漢たち 雅

けふも元気なバカボンのパパ 葵

横綱になるかならぬか賭ける場所 七

悩む乙女へ雨よ降れふれ 桜

寒雷が切り裂いた夜の秘め事を 孝

未練を叩く太棹の撥 葵

北斎の浪が呑みこむ木つ葉舟 孝

稼いでは摩る相場師の業 全

膝に抱くきじとらぶちの大欠伸 葵

レトルトの飯それも飽きたり 孝

中天の月を浮かべるミナレット 雅

勇者の面包むうそ寒 孝

ナウ 渋柿を剥いては吊るす郷の軒 七

IT企業誘致進んで 葵

石地蔵水と硬貨を欠かさずに 孝

むにやむにや話し這ひ這ひもする 七

どこまでが夢か花びらふうはりと 桜

袱紗捌きののどやかな午後 雅

連衆 坂本孝子 石川 葵 武井雅子

松本端七

赤龍の座

歌仙「銭洗ふ」

鈴木英雄 捌

銭洗ふ腕の白さや春まぢか 英雄

寒梅ほのと紅をさす枝 荷夕

朋友を招く座敷を設へて 肇

素焼きの皿を選ぶは愉しき 遊眠

くつきりと古城の濠に映る月 有子

遠く小さく威銃鳴る 京子

ウ 墓掃除祖母はかすりのたすき掛け 夕

愛想笑ひのお茶運ぶ君 英

御主人様お帰りなさい秋葉原 眠

お腹のなかに宿るお情け 肇

補助輪の自転車横ママ走る 京

算数得意パツと暗算 有

上海に真珠とまがふ夏の月 夕

交はず老酒涼み台にて 英

柔術の奥義たづねて叩く門 肇

小粒ながらも一部上場 眠

夢うつつラジオの告げる花便り 京

箱で届きいた芹と蓼の芽 有

ナオ 中学校校歌斉唱風光る 全

無駄遣ひした時はもどらず 肇

びんぼーのぼーがこのごろながくなり 英

三軒長屋シャレたカフェーに 眠

しぐれゆく荻須の背とベレー帽 夕

凍江渡る敗残の兵 肇

駆け寄つて胸の温みを分け合つて 京

あちらのレディーにブルーキュラー 肇

七十年色即是空まあいいか 眠

何か忘れたやうな気がする 京

月皓皓火元確認指差呼称 肇

万鬼祭とてぐるり妖怪 有

ナウ 椋鳥の群かしましくビル街に 夕

大道芸で稼ぐ食ひ扶持 肇

近頃は流行らぬ煙草くゆらせて 京

肥後守にて削る鉛筆 肇

花の駅弁当売りの声響き 有

ふるさと早も笑ふ山並 眠

有 連衆 西田荷夕 宇田川肇 内田遊眠

佐々木有子 鷺山京子

第百六十六回猫蓑会例会  
初懐紙 歌仙六巻 3〜4  
令和六年一月二十八日 首尾  
アルカディア市ヶ谷

白籠の座

歌仙「橋を名に」

宮川尚子

捌

橋を名に持つ駅過ぎて春近し

尚子

川面の風に芳る蠟梅

ひろみ

楽しげに「にいに」と叫ぶ妹ゐて

鑑

じゃんけんぽんで決める順番

美友紀

月待つと窓辺に卓を調へぬ

魚彦

えんま蟋蟀ふいに鳴き出し

敦子

ぴゅつと飛ぶ酸っぱい汁の青蜜柑

み

ごめんなさいがきみの口癖

尚

目が合ったやうな気がする昼休み

紀

愛の台詞をAIに聞く

鑑

週末の溝板活動秘書まかせ

敦

次第に荒るるふるさとの山

彦

ウオッシュレットないならキャンプ行けません

尚

出目金の鉢月を掬へり

み

懲りもせず今日もまた買ふ宝くじ

鑑

小学校に贈るグローブ

紀

花盛り揃ひの帽子鼓笛隊

敦

角を曲がれば遠蛙なり

彦

ナオ淡雪のマラソン大会給水地

み

胡同で売る青銅の壺

尚

友とならどんな酒でもうまいもの

紀

救ひの話特に警戒

鑑

古屋敷稲荷の狐穴に棲む

彦

畳替するボスの背筋

敦

お互ひの夢みて眠る二十五時

尚

想ひ述べても足らぬ恋文

み

病室のセザンヌの絵に癒されて

鑑

保険制度はことに煩雑

尚

じやがいもをからりと揚げて月上る

紀

銀輪で行く紅葉の道

敦

ナウいかめしい髭の案山子に皆お辞儀

み

小さき畑のぼつぼつとある

彦

手づくりのパウンドケーキおみやげに

紀

祖父のメールに多い顔文字

彦

咲く花に永遠の平和を祈願して

鑑

城址公園うららかな午後

敦

連衆 江津ひろみ 荒木 鑑 奥野美友紀

御園魚彦 武井敦子

黒籠の座

歌仙「招福の」

岩崎あき子

捌

招福の根付の揺れる春小袖

あき子

初芝居にはまねき賑やか

千恵子

凧合戦子等も大人も声あげて

秀夫

木の芽田楽重箱に詰め

忠史

茶畑の上に昼月忘れ霜

徹心

新幹線はまたもトンネル

心

禁煙のビジネスホテル予約する

夫

楽しみ半分明日のお見合

史

即席の淑女の立居粗つぽく

千

二人で巡る恩賜庭園

史

噴水の噴きあげてゐる丸い月

千

ひとつふたつと拾ふ空蟬

夫

回り道天神様から末社へと

史

家系たどれば樹形図のやう

千

シヨートケーキクイズを当てた順番に

史

あいつの癖は後出しのチョコキ

心

異国語の入り混じりたる花の下

史

爆音過ぎて残る逃走

夫

ナオ穴開きのブルージーンズあたたかし

心

ヒアルロン酸週ごとに打つ

千

若きは省略をする句読点

史

告白せずにすぐに同衾

千

好き嫌ひはつきりさせてケセラセラ

心

寒垢離をして消ゆる妄念

千

泣上戸早くも見せる正体を

心

そこまで言ふか記者の質問

史

うつちやりに慌て飛び退く砂かぶり

心

捨案山子でも睨みかせる

夫

芋名月わいわいと来て鍋囲む

全

目印にする色変へぬ松

史

ナウ潮時を察する術を渡り鳥

夫

パイプ煙らす老いた船長

心

SPのB面ばかり繰り返す

夫

母の説教今は懐かし

千

花一輪見つける朝の深呼吸

あ

臚おぼろの影はほのぼの

心

連衆 鈴木千恵子 田中秀夫 根津忠史

佐藤徹心

第百六十六回猫蓑会例会  
初懐紙 歌仙六巻 5〜6  
令和六年一月二十八日 首尾  
アルカディアアケ谷

金龍の座

歌仙「待春の枝」

鈴木了齋 捌

待春の枝へ朝日の届きけり

了齋

ふくら雀の群るる公園

純子

かくれんぼ最後のひとり探しぬて

香里

双眼鏡をやを取り出す

美智子

あくまでも朧なるまま臘月

陽一郎

垣根を越えて土匂ひくる

霞

踏青のはるかに船を望むらん

智

いつかは帰るジャガタラの街

斎

嬰兒のわが子はすでに成人か

香

裾長き衣似合ふ後ろ手

霞

恋歌は得意だけれど恋はへた

陽

思慕の視線にいつも気付かず

霞

蛩籠ほのめきのまた揺るるたび

純

釣瓶の井戸に瓜冷やす月

霞

のぞき込む水に黄泉路の己が顔

陽

伊邪那美が呼ぶおいでおいでと

智

交差点ごとに必ず返り花

純

子守の袖をかすめ空風

霞

ナオ 高層のビルをワーママ飛び出して

純

踏切板を思ひきり蹴る

陽

奨学金元手に稼ぎ大富豪

純

山もいつしか崩す人あり

智

跡もなく径の消えゆく地平線

霞

無風のはずが星条旗揺れ

陽

ほんのりと髪の香りのよみがへる

香

素足の膝をわが枕とし

斎

尽すたびダメンズばかり育成す

香

AIの描く夢のその先

純

満月が西から昇る波がしら

智

舳先に新酒奉る宵

霞

ナウ 篠笛を秋の祭に吹き鳴らし

斎

青い鉢巻道に落ちたる

香

誰もみなスマホ掲げて撮る動画

智

眠気覚ましの初蛙跳ぶ

陽

花の雨小さき水輪も花も散り

斎

いつまでもゆれやまぬ鞆

香

連衆 近藤純子 式田香里 聖成美智子

秋山陽一郎 高塚 霞

銀籠の座

歌仙「つすロキヤす」

平林香織 捌

うす日さす路地に一群水仙花

香織

寒稽古へと向かふ少年

正夫

踏切に特急列車の通過みて

アンズ

木目込人形つんとお澄まし

豊美

何もかもフォトジェニックに月明り

洋子

鹿の声聞く山峡の宿

雅世

ウ ちびちびと玻璃の器で今年酒

夫

刷毛で項を白く塗り込め

織

先斗町カメラ小僧のつきまとひ

豊

昭和歌謡の捨てちやつた恋

ア

砲台を据ゑる島へと伝書鳩

世

空自海自の妙なしがらみ

洋

夏深し帰化植物の繁茂する

織

涼しき月に捕虫網振り

ア

放課後にかくれんぼする鎮守様

夫

調子はづれのジンタ近づく

洋

ブランコの花の頂越えさうに

豊

豊み鯛のけぶる夕暮

世

ナオ 耕牛のゆつくり進む背に風

夫

いつの間にかに治る腰痛

織

フラダンス波打ち寄せる浜辺にて

豊

ハッピートーク彼とLINEで

ア

火のやうな熱き心の雪女郎

世

牡丹鍋には土の味はひ

洋

鷹匠が都会の街に呼び出され

織

補聴器つけて寄席通ひする

夫

思ひ切り張り扇する名場面

ア

ティータイムしてほつとくつろぐ

豊

月円か作務衣の袖を掲ぐれば

世

秋篠寺は秋色の中

洋

ナウ 松ぼくりポストの上に並んでる

織

既視感のある揺り鉢の筋

ア

湧泉で作る老舗の胡麻豆腐

豊

藍の暖簾に時を映して

洋

休みなく西郷像に飛花落花

夫

凧をふはりと揺らす中ぞら

世

連衆 國司正夫 松島アンズ 高橋豊美

大島洋子 篠塚雅世

令和五年十二月九日 首尾

第十八回猫蓑会リモート

Zoom  
18  
1~4

夢の浮橋の座

二十韻「筆塚の」

由井 健 捌

筆塚の穂先に宿る冬日かな

千恵子 健

紅を滲ませ年の梅咲く

千恵子

薄茶席師匠の点前の嬬やかに

ゆう子

可愛い顔のお澄ましの子等

敏枝

ウ 行水を終へて鹽に浮かぶ月

千

揃ひの浴衣着ての銀ブラ

健

そつと肩抱きシャンソンに聴き入りて

枝

そ知らぬ振りで過ぎる黒猫

ゆ

峰々を回峰行の草鞋ばき

健

オールドーズ夢の境地へ

千

ナオ 掛け軸の妖怪変化踊りだし

ゆ

打つた白球軽く場外

枝

渾身のプロポーズ決めVサイン

千

ワインテージ汲み夜長睦みて

健

満月の金波銀波に舟を出す

枝

何を置いてもまづ秋祭

ゆ

ナウ 寅さんが長口上の啖呵売

健

インバウンドの並ぶ団子屋

千

ビル街のからくり時計花ふぶく

ゆ

里の便りに鯉来たとか

枝

連衆 鈴木千恵子 夷藤ゆう子 箭内敏枝

峰の座

二十韻「厚着して」

佐藤徹心 捌

厚着して三人掛けの中の席

徹心

歳末セール音響の渦

あき子

ピアニスト指を大事に守りぬて

多紀子

駆けだしていく登校の子等

志保子

ウ 留学へ見送る月の滑走路

あ

涙を誘ふ秋の夕焼

心

ブランド栗のグラッセゆつくりと

志

暴れ馬追ふ馬子赤ら顔

紀

ころころと乙女心はよく変はる

心

ピンクの付箋ハートいっぱい

あ

ナオ 交差点肩触合つて目眩する

紀

浴衣まつて行く彼の部屋

志

窓越しにスカイツリーと夏の月

紀

鼠小僧の墓石欠き取る

心

倫敦の城へそくりで買ふ夢を

志

アビーロードに甦る歌

あ

ナウ 令和にも生き延びているサユリスト

心

おたまじやくしを掬ふ沼の辺

あ

風のまま膨れ崩れる花筏

志

甘味処の午後のうららか

紀

連衆 岩崎あき子 今井多紀子 北龍志保子

横雲の座

短歌行「枇杷の花」

西田荷夕 捌

枇杷の花ひと日ひと日を慈しみ

荷夕

空をめざして尖る雪吊

了齋

城下町区割りの線の美しく

葵

迷子の猫を探す貼り紙

あつさ

ウ 月の夜に深まる謎を追ふ刑事

齋

ゲノム情報漏れてすさまじ

夕

ふたりしつぽり飴色の時

さ

帽子だけ転がる無言劇の後

葵

そよるそよると風のたはむれ

夕

屋形舟やれこの盃に花片を

齋

蓬の餅を二つ頬ばる

葵

ナオ 南画にはのどかな仏在します

さ

閉架にひそと下賜の巻物

夕

ガラクタをお宝ですとMCに

さ

蝶ネクタイが右に傾き

葵

膠着の家族会議へ夏の月

夕

おいらの恋はいつも汗だく

齋

食後の葉またも忘れる

葵

十人のをとこ飲み込み九人捨て

夕

知らぬ間にジキルとハイド入れ替はり

齋

幼友達いまは大臣

夕

汽罐車が万葉の花の橋を行く

さ

春蚕かさりと微睡の中

葵

連衆 鈴木了齋 石川 葵 清水あつさ



叡山の奥の出といふ冬の虹 良子

大歳近き湖の漣 鄭和

ゴルフアのクラブ選びのきりもなし 香織

父と一緒にテレビ観戦 揺子

射し込める月影届く黒書院 和

乱るる萩を壺に活け込み 良

楊貴妃をめざし糸瓜の水を探る 揺

イケメン医師に通ふ診察 織

戦争よりキスは強いと嘯いて 良

僧は黙して何も語らず 和

鳥獣戯画甲乙丙巻公開中 織

夏の霜分け仮面ライダー 全

蛍を追うて本州縦断す 和

太麺が好き北の拉麺 良

長兄は人の意見を聞かぬたち 揺

胡弓に乗せて踊る島唄 織

車座に酒酌み交はず花のもと 揺

暮れ遅き日は猫と縁側 和

連衆 高山鄭和 平林香織 上原揺子



連句の先達 誌上インタビュアー Q & A  
その⑤ 本屋（一紅庵）良子さん

Q1●連句歴はどのくらいになりますか。

A 昭和六十一年（一九八六）なので、四十年近くになります。

Q2●連句を始めたきっかけは何ですか。

A その頃は、杉並区に住んでいて、バレエボールをやっていました。チームの監督が、猫蓑会桃径庵一世の式田和子さんと、連句に誘われたのがきっかけです。

Q3●初めての実作の場はどこでしたか。どのような様子でしたか。

A ほどなく杉並から逗子に引っ越ししました。朝日カルチャーの連句教室にも通い始めました。

和子さんが、明雅先生と逗子に行くから、お仲間を集めてちょうだい、とおっしゃり、拙宅に明雅先生と和子さんがおいでになりました。湘南連句会です。とりあえずバレー

ボールの友人たちを集めました。もちろん連句ははじめての人ばかり。みんな付けられなくて困っていました。中に、紫色の洋服を着ている人がいらして。先生が、「パー

プルの洋服、ということ詠めばいいんです」とおっしゃり、彼女が「こんなもんでいいんですか？」と驚いていました。その時のメンバーの一人、加藤亀女さんは、今でも連句を続けていらつしやいます。そして、先生がおっしゃった「付くものは付くけれど、付かないものは付かない」ということばを今でも覚えていらつしやるそうです。

Q4●明雅先生との思い出を教えてください。

A 昭和六十一年（一九八六）、先生は大病をされました。みごとに一命をとりとめ、病後、はじめての外出ということで湘南連句会にいらつしやいました。そのときの思い出を、先生は『季刊連句』第16号にお書きになっています。

その中で、先生は、先生の連句の師である根津芦丈翁が最晩年に発行した雑誌『山襖』第7号の芦丈翁の「恋句あれこれ」というエッセイに言及していらつしやいます。芦丈翁の「政子の石のぬくき人肌／膝など濡らして給へと稚子を抱き」という恋句の説明を、先生は次のようにお書きです。

この一連は児を欲しい人と、安産のお礼参りの人とが落合つて、まあ佳い赤ちゃんだ、一寸私に抱かせてと頼む、その赤ん坊に「オシッコをして膝を濡





鎌倉八幡宮弁天島の政子石

らして給へ」と呼びかける。其姿に対し赤ん坊の母親は勿論父親も、にこにこして見て居るさまである。猶「給へ」の一語でこの両者の人柄も、立派な人々であることが知られる。赤ん坊に尿で濡らされると、子供ができるとの迷信は今もある。美しい恋句である。

先生は、政子石のことが「頭の隅のどこかにこびりついてた」そうです。病が癒えて逗子へいらつしゃったとき、連句会の前に、皆で鶴岡八幡宮の寒牡丹を見に行きました。そして、先生はその政子石を発見されました。「二十年ぶりで師匠に巡り合えたかのように懐かしかった」とお書きです。その日の発句は、「政子石陽に艶めきて冬牡丹」という先生の句でした。



Q5 ● 連句をやっている、よかったことは何ですか。

A その後、逗子から岐阜へ引越しました。明雅先生に獅子門を紹介していただきました。知らない土地での暮しも、連句のおかげですぐに彩り豊かなものになりました。

ほどなくわたくしは藜杖社という獅子門の連句結社の第六世として立机しました。「宿りせむ藜の杖になる日まで」という芭蕉の句にちなんだ結社です。連句は、月に一度、明雅先生にお手紙でご指導をいただきました。毎回便せん六〜七枚ほどに、びっしりとさまざまな教えが書かれていました。先生からいただいたお手紙は、ワインの箱三箱にびっしりたまりました。この書簡指導が、わたくしの連句を育ててくれました。

亡くなられた猫蓑会同人の生田目常義さんは、「これは、連句界にとっても宝だから、活字にして残すと良いよとおっしゃってくださいました。後に先生もご快諾くださったので、平成十一年（一九九九）に『藜杖―連句集』（まつお出版）という連句集を出したときに、巻末にこの書簡集を載せさせていただきました。そんなことができたのも連句をやっていたおかげです。わたくしは「あとがき」にこんなふうに書きました。ほんとうに連句をやっていたよかったです。



明雅先生と筆者（2002年4月25日）

連句は座の文芸であります。これまでの国民文化祭を始めとして、各地で開かれます大会でお知り合いになった連衆は数に限りがありません。私は文学には自信がございませんが、友だち作りは大好きです。この連句集の中には百二十名の方々が連衆として加わってくださっています。連句を始めてからの友人の増え方といったら驚くばかりです。

Q6 ● 印象に残っている付け（または、発句、一卷など）を教えてください。

A 明雅先生の『連句集 猫蓑』（一九八二、永田書房）の中に「山茶花」の巻という歌仙が載っています。先生と草間時彦さん、平井照敏さん、小出きよみさん（名残の表から）の四吟です。

明雅先生愛蔵の

山茶花やむかし道中旅碗

初時雨来る土の冷え冷え

十軒の商店街に客なくて

つれづれのまま掃除始める

待ちかねる芋名月の供へ酒

枝うつりして色鳥の数

野臥りのひそみし山も紅葉濃く

鈍一丁で刻む阿羅漢

とりすがる妻子を縁に蹴落して

時彦  
明雅  
彦敏

敏彦  
雅彦  
敏彦

この一巻が、これまでの連句人生の中で強く印象に残っています。とくに先生の月の句が、雅と俗を融合させたみごとな一句だと思えます。全体もドラマティックに転じていて、付けと転じの案配が絶妙です。この一巻をめぐる、明雅先生、時彦さん、照敏さんの座談会も掲載されていて、学ぶところの多かった一巻です。

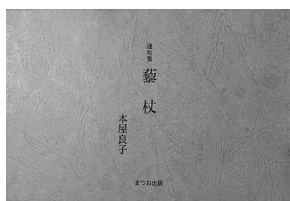
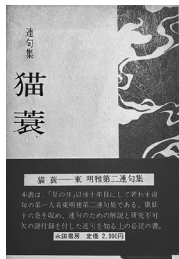
自分の句でいいますと、全国連句いなみ大会が四年に一回開催されていましたが、その平成九年（一九九七）第二回の折、「地歌舞伎」の巻で富山県知事賞を受賞しました。明雅先生が選者でした。先生は、なぜだか犬張子がとってもお好きでした。犬張子は嫁入りのときに娘に持たせるお守りです。この一巻の恋句にわたくしは「犬張子」の句を詠んでいます。先生が選んでくださったのは犬張子の句があったからではないかとひそかに思っています。

また、先生が、最後に公式の場に出いらつしゃったのは、平成十四年（二〇〇二）の藤祭だったと思いますが、その時の先生の句が「藤の香や文台捧ぐ御宝前」でした。忘れられない一句です。

Q7 ●連句の後輩にアドバイスがあれば、お願

いします。

A 「文章に頼りすぎない」ということを申し上げたいと思います。明雅先生のお書きになったものは、確かに大切な教えですし、文字に残っていることはありがたいことです。でも、連句においては一番大切なのは、その時、その場の句の付けと転じです。ことばにできないようなその座の空気感や連衆との一体感によって連句は巻かれています。杓子定規にはなく、何かにこう書かれているからとか、「先生がこうおっしゃっていたから」と声高に主張するのはなく、目の前に出された句にしつかりと向き合うことが大切だと思います。



会員の受賞―第28回えひめ俵口全国連句大会

愛媛県知事賞

「花に逝く」の巻

愛媛新聞社長賞

「青鷺」の巻

南海放送賞

「ミックジャガー」の巻

庚申庵倶楽部賞

「東京マラソン」の巻

俵口賞

「青春の疵」の巻

「問答」の巻

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子 捌

井上里美 捌

江津ひろみ 捌

荒木 鑑 捌

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子 捌

鈴木千恵子 捌

御受賞おめでとうございます。本号には「花に逝く」の巻を、他の作品を次号に掲載します。

歌仙「花に逝く」

鈴木千恵子 捌

師の教へ守り通して花に逝く 鈴木千恵子

とぎれとぎれに鳴ける松蟬 山田美代子

磯遊びフリースカート濡らさずに 佐藤 徹心

名を呼びながら友に手を振る 近藤 純子

久々に盃かはす月今宵 代

零余子を茹でて塩加減よき 千

隔年の地芝居めざし旅に出む 純

超望遠のカメラずらりと 心

九回の裏に待つてた大勝負 千



●既往の行事

- 一月二十八日(日)に、アルカディア市ヶ谷にて、第百六十六回例会(令和六年初懐紙)を開催。歌仙興行。当日作品は今号4〜6ページに掲載。
- 四月二十四日(水)に、亀戸天神社にて、第百六十七回例会(藤祭例会)を開催。神楽殿にて正式俳諧興行(一般公開)の後、二十韻を興行。当日作品は次号に掲載予定。

●今後の行事予定

- 六月二十三日(日)に、アルカディア市ヶ谷にて、第三十四回猫蓑同人会総会を開催。歌仙興行。
- 七月二十八日(日)に、江東区芭蕉記念館にて、第百六十八回例会(猫蓑会総会)を開催。歌仙興行。
- 十月十六日(水)、江東区芭蕉記念館にて第百六十九回例会(芭蕉忌・明雅忌)を開催。正式俳興行の後、源心興行。
- 猫蓑会リモート
  - 令和五年十二月九日(土)開催の第十八回作品を今号の7〜8ページに掲載。
  - 令和六年二月二十三日(金・天皇誕生日)に第十九回、四月十三日(土)に第二十回を開催。作品は猫蓑会ホームページに掲載。

- 第二十一回は六月八日(土)に開催。
- 第二十二回を八月十日(土)に開催予定。
- リモート連句会や連句室の使用に関する問い合わせは平林香織(Khira884@gmail.com)まで。

●猫蓑会ホームページについて

- ホームページをリニューアルしました。よりいっそう内容を充実させていく予定です。

●会員の新刊書

- 宮川尚子(川柳号・瀧村小奈生)様が川柳句集を上梓されました。
- 瀧村小奈生



『留守にしております。』  
(令和六年二月、左右社)

留守にしております秋の声色で  
一本のバス待つ春のふくらはぎ  
どこまでも晴れて龍角散日和

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます。

- 岩田蝸舎様 令和六年二月 一万円
- 基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店  
猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員

- 篠塚雅世(東京都) 令和六年一月入会

●訂正

- 第百二十三号「事務局だより」の「新会員」お名前に誤記がありました。大変申し訳ありませんでした。お詫びして訂正します。  
(誤) 秋山洋一郎 (正) 秋山陽一郎

●『猫蓑通信』のこれからについて

- 今号より編集人が平林香織となります。
- 創刊号より第百二十三号まで年四回刊行して参りました。理事会で検討の結果、諸般の事情により、今後は、年三回(二月・六月・十月)の刊行とすることになりました。印刷所を関東図書(株)様に変更し、種々の調整のため、前号から今号までの間に少し時間が空いてしまいました。発行回数は減りますが、より一層誌面を充実させていきたいと考えております。引き続きご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

定期刊行 『猫蓑通信』第百二十四号

- 令和六年六月十五日発行
- 発行人 猫蓑会 鈴木千恵子
- 事務局 佐々木有子
- 〒161・0033

東京都新宿区下落合4・9・34・313

- 編集人 平林香織
- 編集委員 岩崎あき子・奥野美友紀・佐々木有子・鈴木千恵子・武井雅子・田中秀夫(五十音順)
- 印刷所 関東図書株式会社